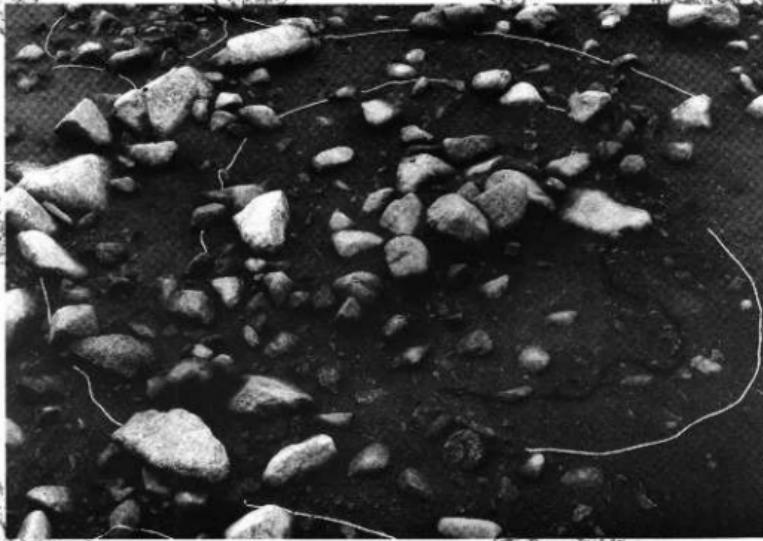


# 前田中遺跡

1995年3月



匹見町教育委員会

# **前田中遺跡**

**1995年3月**

**匹見町教育委員会**

## 例　　言

1. 本書は、島根県益田農林事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成5年に行った道川地区県営圃場整備事業に伴う、前田中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　島根県教育委員会文化課

島根大学法文学部教授	田 中 義 昭
広島大学文学部助教授	河 渕 正 利
山口大学人文学部教授	中 村 友 博
事務局　匹見町教育委員会教育長	斎 藤 惟 人
匹見町教育委員会教育次長	渡 辺 隆
匹見町教育委員会社会教育主事	河 野 敏 幸
調査担当者　匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡 辺 友千代
調査補助員　竹本　誠	
調査参加者　栗田 定、森脇雅夫、渡辺 照、渡辺 勉、長谷川時子、山崎リマヨ、溝 田久子、西田キヌエ、大谷孝子、清寺幸子、青木スミエ、大谷三重子、清 寺智恵子	

3. 発掘調査に際しては、益田農林事務所の桐木俊介技師をはじめ、島根県教育委員会文化課の今岡一三主事に終始多大な協力をいただくとともに、山口大学人文学部の中村友博教授からも一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合せて感謝の意を表したい。

また発掘現場においては、所有者の青木美智子氏、そして圃場整備の堆進委員長である河野裕氏にはご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、現場あるいは編集等に使用した現地地図は、匹見土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図等のものは縮尺1/25000を使用したものである。

なお編集にあたっては、大賀幸恵・和田詩子・青木美和氏らが携わり、執筆・編集は渡辺友千代が行った。

## 目 次

第1章 遺跡位置と環境	(渡辺友千代)	1
第1節 遺跡位置		1
第2節 地域環境		1
第2章 調査に至る経緯と経過	(渡辺友千代)	4
第1節 調査の経緯		4
第2節 調査の経過		4
第3章 調査の状況	(渡辺友千代)	5
第1節 調査にあたって		5
1. はじめに		5
2. 調査区設定		5
第2節 略序概要		6
1. 略序状況		6
2. 文化層の概要		9
第3節 遺構		10
1. はじめに		10
2. 窃穴住居址 (SI)		10
3. 柱穴 (P)		13
4. 上坑 (SK)		15
5. 配石 (SX)		16
6. 遺構と出土傾向		20
第4章 出土遺物	(渡辺友千代)	23
第1節 出土遺物の概要		23
1. はじめに		23
2. 出土遺物の概要		23

第2節 実測遺物	24
1. はじめに	24
2. 実測土器	24
3. 実測石器	31
 第5章 小 結	(渡辺友千代) 32
第1節 遺跡の様相	32
第2節 配石寸考	33

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡	3
第3図 遺跡配置図	7～8
第4図 十層図（西壁）	9
第5図 配石遺構断面図とその標高深度状況図	10
第6図 遺構全図(1)	11～12
第7図 住居址断面図	13
第8図 SX20配石図	15
第9図 SX21配石図	16
第10図 SX25配石図	17
第11図 SX13配石図	17
第12図 SX16・SX14配石図	19
第13図 遺構全図(2)	21～22
第14図 遺構図と平面的遺物出土状況図	25～26
第15図 出土土器実測図(1)	27
第16図 出土土器実測図(2)	28
第17図 出土石器実測図	30
 第1表 遺構計測表	14

## 図 版 目 次

- 図版 1 遺跡周辺を鳥瞰する
- 図版 2 1. 北面から見た遺跡遠望 2. 遺構表出状況(堅穴住居内)
- 図版 3 1. SK04 検出状況(北東から) 2. SK10・SK11・SK20・SK21 検出状況(南から)
- 図版 4 1. SX25 検出状況(西から) 2. 南から見た配石検出状況(手前はSX03)
- 図版 5 1. 東から見たSX10 2. 北から見た配石群  
(2重サークル状が看取される)
- 図版 6 1. 西面の配石群(中央部はSX08) 2. 西から見たSX10(中央部)
- 図版 7 1. 東から見た配石群 2. 北から見た堅穴住居址
- 図版 8 1. 発掘区全景 2. 土器類(1)
- 図版 9 1. 土器類(2) 2. 石器類

## 遺 跡 要 旨

本書は、島根県美濃郡四見町大字道川口89-2番地に所在する「前田中遺跡」の報告書である。

調査は、当町の道川地区営農場整備事業に伴って、平成5年度に益田農林事務所から調査依頼を受けて、四見町教育委員会が実施したものである。

調査面積は150m<sup>2</sup>。遺物包含層は4層黒色粘質土で、縄文時代後期前葉のものであった。遺構は、4層と5層黄灰色砂土との層界に検出されたが、層序関係から遺物と遺構は相伴するものと判断された。そのうち遺物は、総点数477出土し、土器片が76%、石器は12%あまりを占めたが、土器片は上器形式さえまばらな小片・細片が大半であった。また石器は成品としての石具は13点と僅少で疑問点も多く、そこには具体的な生活誌は浮び上がってこなかった。

遺構には柱穴状のビット25穴、土坑状のもの24基、竖穴住居址1棟、配石遺構28基が検出された。そのうち特に配石遺構は注意されるが、完掘精査していないために詳細については明らかではない。



南東からみた配石群



# 第1章 遺跡位置と環境

## 第1節 遺 跡 位 置

前田中遺跡は、広島・山口の2県に接する西中国山地地域と称される山間地の島根県美濃郡匹見町に存在する（第1図）。

当匹見町は、東西17.1km、南北18.1kmを測り、総面積300.88m<sup>2</sup>あって、96.2%は林野で占められている。可耕地といえば、匹見川を中心に諸支流域に僅かにみられるにすぎない。本遺跡はそういった立地下にあり、つまり中国脊梁山地から発した匹見川が狭長な谷平地を形成した上流部にある、匹見町大字道川口89-2番地に所在する（第2図）。



第1図 遺跡位置図

## 第2節 地 域 環 境

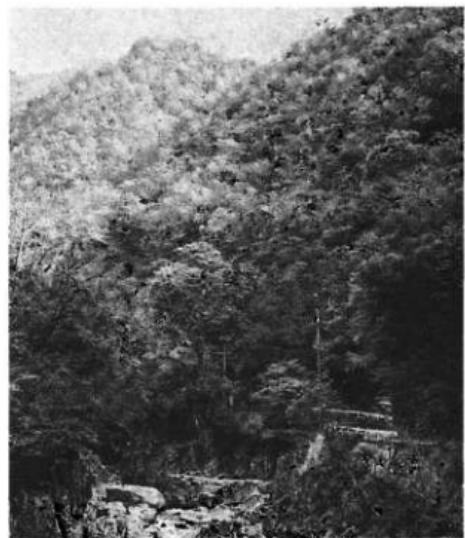
本遺跡が所在する道川地区は、南東側を北東—南西に走る1000m内外の中国脊梁山地がひかえ、その山地に沿って匹見層群といわれる数条からなる地溝状陥没体が並走している。この流紋岩質凝灰岩を主体とする地溝体に沿い、匹見川本流は右支の赤谷川などの河谷を集め、狭長な河岸段丘を形成しながら、標高800～400m内を流下して日本海に注いでいるのである。

そうした山岳立地のため、年間平均気温は12℃と低く、降水量も2250mmと多く、また多雪地帯である。したがって、林相は温帶林のナラ林を主体とするが、岩倉山（1022m）・高岳（1054m）

などの高位な山地には冷温帯林のブナ帯が分布している。しかし、匹見川や支流域の低位地では、暖帶常緑樹であるウラジロガシなどの群生みられる。

また動物においては、河には鮎鱥科のゴギ・ヤマメ・アマゴなどが生息し、たまにオオサンショウウオもみられる。そして山地には中形動物としてのツキノワグマやイノシシもあり、山くはシカも多く生息していたらしい。小形動物のキツネ・タヌキ・アナグマ・ノウサギなどは無論のことであるが、このように動物たちが繁茂している背景には、実をつける堅果類の落葉広葉樹帯が広がり豊かな自然が遺されているということにあろう。

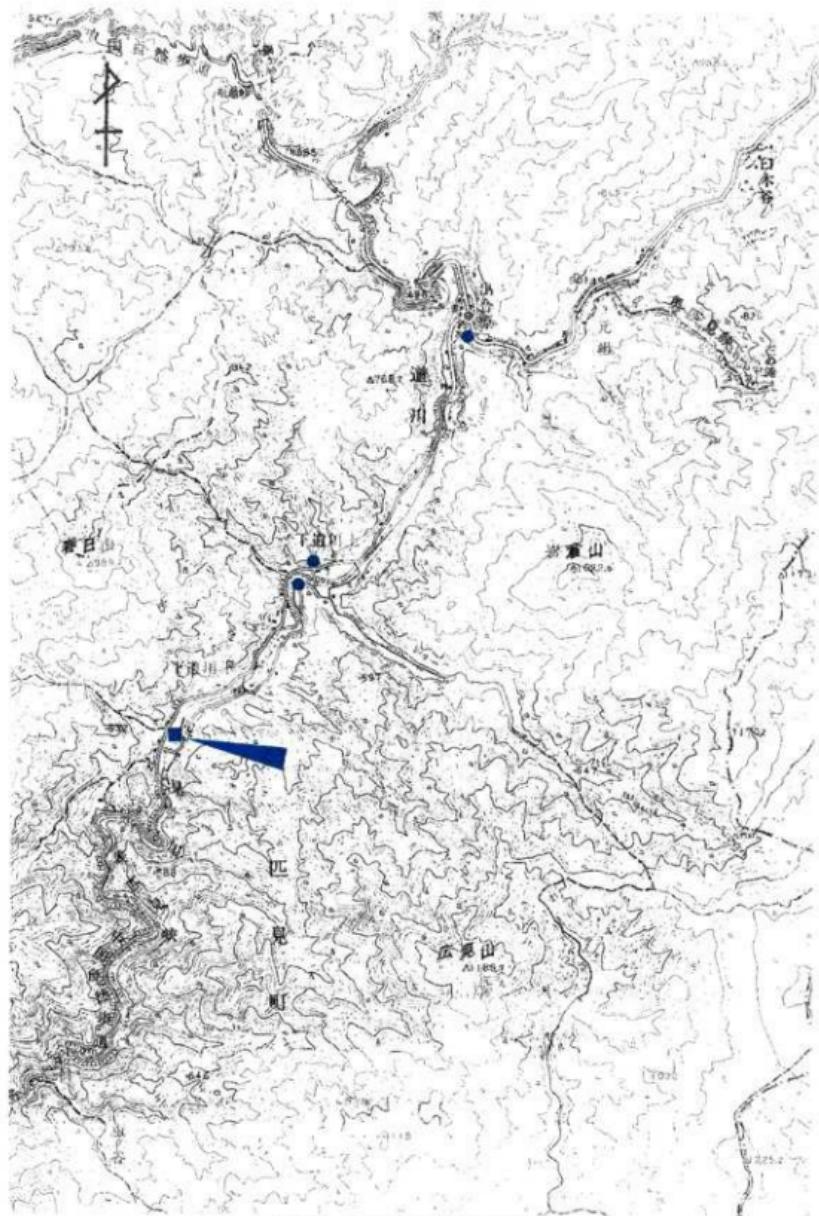
当地区の生業は、山間地ということもあって、1次産業を中心とした農林業である。昭和初期には盛んに製炭や木材生産を行い、人口も1000人台を越えていたが、30年代に入ると製炭などの林業の斜陽化にともない、典型的な過疎地区となり、現在丁度82、人口230と減少している。蕭条期には浜田藩に属し、木地生産、コウゾ・ミツマタを原料とする紙業などの生産が行われ、とくにタタラ業は盛んであった。また社会生活においては、広島県境地ということもあって、芸北地域（広島県北部）と旧くから交流があって通婚圏でもあり、移住の多くはそうした山陽側からの越境者で占められていて、そこには生活の立て方にも差異もみられないでもない。



渓谷の国定公園匹見峠（表匹見峠）

歴史環境においては、未開発地区ということもあって、原始古代遺跡はけして多くない。しかし本遺跡の上流部である2川の相会地には、鳥根県史跡に指定されている先土器から縄文前期を包含する新柳原遺跡があり、本遺跡との中間地点には町指定である縄文後期の上家屋（うえなや）遺跡のほか、ダヤ前遺跡が分布している（第2図）。今後、調査整備事業に伴い、分布調査を逐次実施していくため、こうした遺跡は増加していくに違いないと思われる。

（渡辺友千代）



第2図 遺跡位置と周辺の遺跡

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

本報告するものは、益田農林事務所から提示された道川地区圃場整備事業計画に伴って、平成5年度に実施されたものである。

これに先立ち、平成4年6月29日には指導者である島根大学の田中義昭教授とともに、同区内を踏査し、詳細分布調査地として4箇所をまず選定した。そして、これに係る詳細分布調査は平成5年度中に実施するところの匹見町大字道川口89-2番地の前田中地点と、そして同区内の275番地に所在するダヤ前地点であった。そのうち前者地点は、平成5年9月から圃場整備事業が実施される区域内であったため、早急に対応することが迫られたのである。

### 第2節 調査の経過

本遺跡の調査は、当地点の分布調査を同年5月20日に終え、その結果を踏えて同年の7月18日から実施することにした。調査に当っては、分布調査で得られた遺物の疎密分布状況などの資料を基に、本格調査区域を設定することから始めた。

7月下旬には遺物包含層の4層に至り、縄文後期を中心とする遺物が出土し始めたので、逐次、平面的分布及び垂直分布をも実測して採り上げていった。そして8月10日には、土坑などの遺構が確認され始めたので掘削作業を慎重に行うとともに、逐次、遺構実測などを進めていった。9月10日には全ての作業を終え、残る3地点の分布調査に移動したのである。しかし、ダヤ前地点の分布調査中、調査指導者である山口大学の中村友博教授が11月15日に来訪され、本遺跡を見学したい、ということなので案内したところ、4層下位面に露頭する円礫群は配石遺構である遺構との教示を得た。なるほど中村教授の指摘されるとおり、詳細に確認してみると、頗るかれる形態を示していたのである。

したがって、こうした状況から分布調査を中断して、11月16日から配石遺構を中心に追加調査を行って、12月2日に最終的に完了したのである。

(渡辺友子)

## 第3章 調査の状況

### 第1節 調査にあたって

#### 1. はじめに

本遺跡は匹見町大字道川口89-2番地に所在し、その小字名をもって前田中（まえたなか）遺跡と呼称することにした。

該地は道川地区の南西側にあって、狭長な谷平地が部分的に存在するうちの最も下流域の、比高差約m測る左岸にあっている（第2図・図版1）。狭長な河岸段丘が発達する本遺跡周辺は、水田畑が拡がり、町道下道川線を挟んで北東の山裾には民家が点在し、現地標高400～415mを測る。また、狭い対岸には匹見川に沿って県道波佐匹見線が走り、下流に至っては匹見中央部、上流に向っては国道191号に通じている。

#### 2. 調査区設定

調査地点は、分布調査での結果に基づいて、匹見川河畔寄りの標高410.78mを測る河岸段丘端の水田地に設定することにした（第3図・図版2-1）。それは分布調査において、該地点が本命地と想像されたからである。

調査区設定にあたっては、まず基準となる起点杭を任意に調査対象地の南西側に設けることにした。そして、その起点から磁北方向に16m測って杭を打って、これを北西杭とした。さらに北西杭を起点に、東に向って9mを測って北東杭を設けた。これより以降は、これに対照的な実測を行って南東杭を設けて長方形区画としたのである。したがって16m×9mということになり、調査面積は144m<sup>2</sup>とした。しかし終時において、南東端に堅穴住居の出入口と想定される部分が設定外に逸脱して検出されたため、2m×3mを拡張したので、最終的には150m<sup>2</sup>となったのである。

掘削にあたって、調査区が16m×9mと大区画であったために、長方形区画の中心点から縦横方向に、堆積状況確認のためのセクション・ベルト（幅50cm）を設けることにした。そして、その4等分された各地区名を、南西面のものをA区、北西面をB区、北東面をC区、南東面をD区とし、つまり各地区を右回りにアルファベット順に呼称することにした（第3図）。以後この呼称をもって、遺物取り上げなどの実測に地区名をもって、セクション・ベルトを除去するまで引用することにした。

## 第2節 層序概要

### 1. 層序状況

本遺跡における基本層序は、1層の水田耕作土、2層の客土、3層の茶褐色土、4層の黒色粘質土、5層の黄灰色砂土、6層の褐色砂土の順で堆積する（第4図）。

そのうち1層は、水田耕作土であるため粘質性で、灰褐色土であった。層厚は18~26cmを測り、東面の山裾側が総体的に薄かった。2層は、砂質性の客土（末土）で、1~2cm大の砂石を多く含んでいる。層厚は2~5cmを測って、バラつきはあるものの全体的に平均に堆積する。3層は、酸化鉄が含浸した茶褐色土。下位層の黒色土と色調から分層しているが、実質的には同層と類似したものと捉えられる層状を呈していた。つまり、4層黒色土に酸化鉄分が上面に含浸したものと想定されたのである。層厚は、2~8cmを測って厚薄差がみられた。また遺物においては、石器の剝片と想定されるものが多少出土したが、遺構と認識できるものは検出できなかった。4層は黒色粘質土で、やや砂質性である。色調から分層とした茶褐色土と含めて捉えると、層厚は10cmから深層部分で30cmを測るが、総体的には山裾側の東面に向って薄層であった。おそらく水田作造時に削平等によって生じたものと考えられた。

本層では、下位面を中心に多くの遺物が出土しており、また遺構は5層との境界に検出されている。そのうち土器片は、大半が2~3cmと細片で、10cm大のものは10数片と僅少であった。石器類においては、石斧といった生活具の製品は稀で、そのほとんどは小片の石器の剝片である。遺構は、次層の5層との境界に顕在したが、遺物の多量出土状況からみて、生活基盤は本層の下位面であったものと捉えられる。しかし、遺構については同一層内ということもあって、同位面では把握することができなかったものと思われる。また同位面では、20~30cm大の円礫がパート的に検出されていること、これらが状況的に自然流出とは異なり人为的と捉えられたので、やはり本層の下位面であったと想定される。

5層は、黄灰色砂土である。層厚は尖滅部分から、厚部で約13cmを測り、とくに北東面向って尖滅する。多少の10cm大の円礫を含んでいるが、多半は砂上層である。生活基盤以前のもので、おそらく四見川のオーバーフローによる堆積層位と想定される。本層における遺物出土は皆無であるが、ただ4層下位面からの陥入坑と想定される遺構は多く介在している。そのため、堆積幅のある南西面の上位面は段差する。次層の6層は、砂石を含んだ褐色の砂土層である。本層は南東面を中心に厚部で約15cmを測って堆積するが、北東面では確認されなかった。土層色調、あるいは上層の5層堆積状況からみて、おそらく山裾側の東面からの流出堆積と想定される層位と考えられる。遺構は上位層からの陥入遺構は確認されているものの、出土遺物は皆無であった。7層は、基盤層



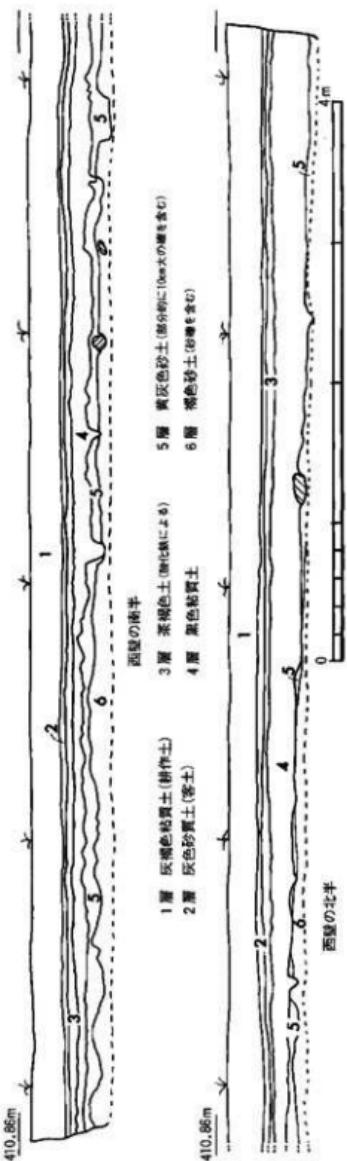
第3図 跡配置図

としての砂礫層である。遺物は勿論皆無であったものの、深く掘削されたSK08などの坑底部は、本層まで達しているものも確認されている（第6図）。

## 2. 文化層の概要

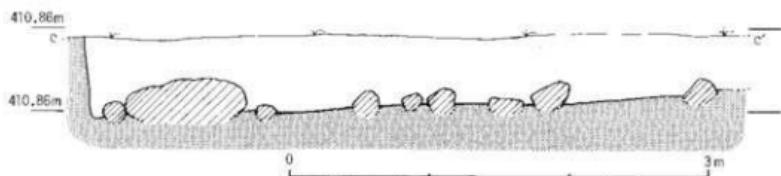
上述したように、本遺跡における文化層は、4層の黒色粘質土であり、そのうちで遺物が中位面から、とくに下位面に多量の出土があったことから、生活基盤は下位面にあったと想定される。しかし同一構内ということもあって、土坑などの遺構において同位面では明確に把握していないが、配石群の一部には捉えられたものもあった。また本層は、層厚10~30cmを測るが、北東面は極めて薄く、端面に至っては尖滅する。これは水田作造時に削平されたものと考られ、該面域での配石には石体が抜き取られたのではないか、とも想像された。これらの配石は、西面では地表から約50cm、北東端面に至っては半分の25cm下に構築されていて、厚薄差がみられたのである（第5図）。

ただしSX01配石遺構については、構築状況から如何に捉えらるかが挿掘ということもあって、判断できない。というのは、円形土坑内に人為（配石？）的と捉えられる石体が確認されないとともに、その土坑内には5cm大の小石を含んだ砂礫が充填しているのである。これを匹見川によるオーバーフローによる流入物として捉えると、構築面が異なるということになり、そうであるとすると、遺物等からこれを裏付ける時間的差の資料が確認されてもよいと思われるのであるが、顕在しないのである。しかも文化層と捉えられる4層には、そういったオーバーフロー等による



第4 図 土 層 図 (西壁)

層序は認められなかったのである。ならば、その砂礫が人為による撤入であったのかというと、問題が余りにも大き過ぎるとともに、精査していないので軽々しくいえないのである。



第5図 配石遺構断面図とその標高深度状況図

### 第3節 遺 構

#### 1. はじめに

遺構の大半は、4層黒色粘質土と5層黄灰色砂土との層界に検出された。これらの遺構を便宜上、形態から4つのタイプに仕分けするとともに、それらを次のような略号もって称することにした。つまり堅穴住居とみられるものをSI、配石と思われる特殊遺構をSX、柱穴状のピットをPとし、またピットより充拡する土坑をSKとした（第6図・第1表）。

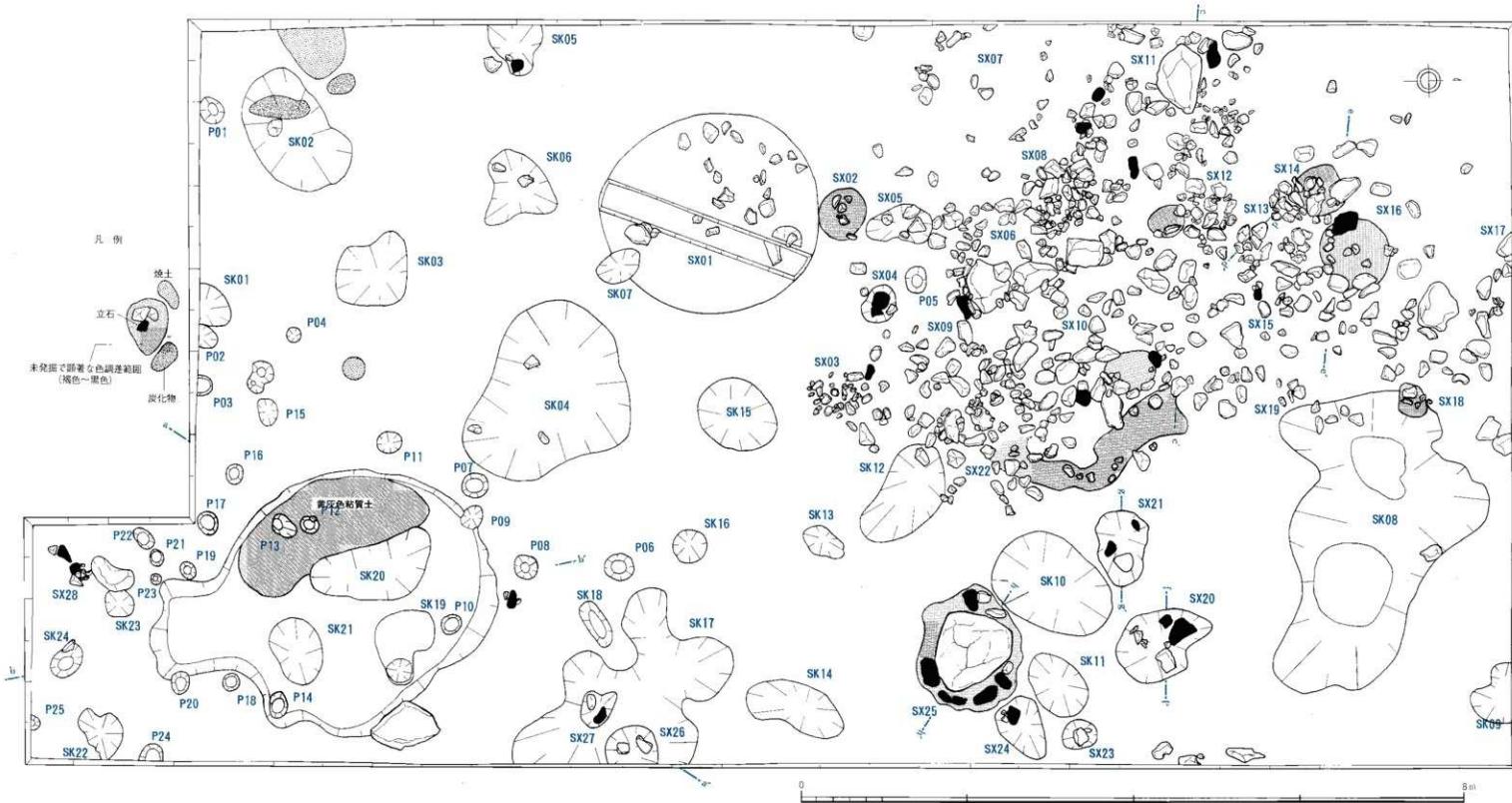
しかし、SXとする配石遺構とSKとした土坑の仕分け方には問題がないでもない。つまり、それらの仕分け方を石材の集石数をもっていのか、もし集石数でいうのなら何個以上もっていのか、等の定義上の問題があるのである。よって、ここではSXと略号するものを「ある意味あい（墓地・祭祀）をもって、石材を用いて構築したもの」として捉えたい。そこには感覚的なものが作用するが「ある意味あい」をもって石材を用いたものと思われる場合は、1基の立石であろうと特殊遺構のSXとしてみ、それが別機能のための土坑と見做される場合は数個の石材が認められようと、ただの土坑としてSKと略号したのである。

検出されたこれらの遺構のすべてについて、完掘あるいは精査していないものもある。とくにSXと略号した配石遺構はそうであり、また形態等において見誤ったものがあるかも知れない。

#### 2. 堅穴住居址 (SI)

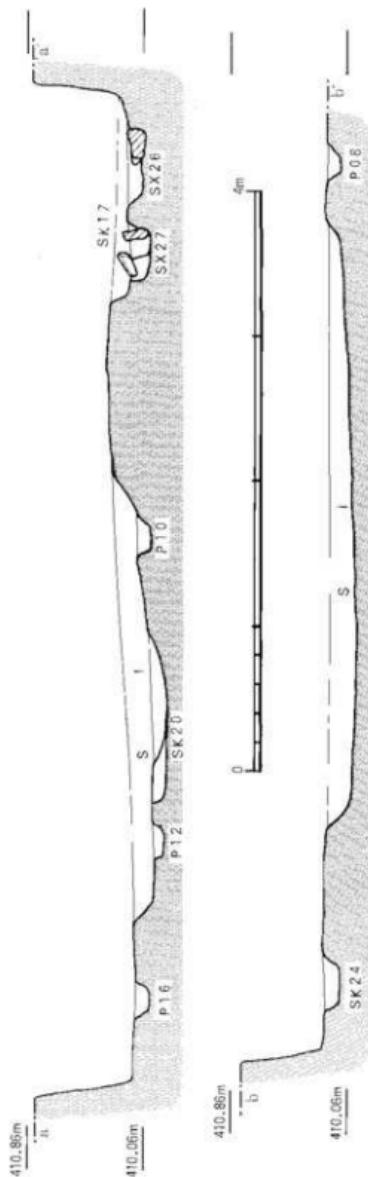
堅穴住居址は、調査区の南東隅の4層黒色粘質土と5層の黄灰色砂土との層界に検出された（第6図・図版7-2）。

本址の短軸は約3.2m、長軸は約4.2mを測り、その長軸は北一南方向で梢円形を呈する（張出部は除いて）。出入口と想定される張出部は南面側にあって、約80cm、幅約110cmを測る。堅穴壁は緩斜で、残存壁高は13~16cmを測り、やや東面が高く、壁溝は検出できなかった。中央部はやや深く



第6図 遺構全図 (1)

第7図 住居址断面図



約20cmを測り、いずれも3つのSK(19・20・21)とP(10・12・13)が介在している(第7図・図版7-2)。これらの構築層(生活基盤層)は、4層黒色土の下位面であったと想定されるので、壁高などの堅穴部は現実測よりは高かったと思われ(おそらく10cm以上)、覆土には自然堆積の黒色土が充填していた。また、その構築層界は、下層の黄灰色砂土まで達していたが、ただ本址の西面には貼ではなかった、かと思われる5層の土質とは異なる粘質性の黄色土が確認された(第6図・図版7-2)。

本址に共伴する柱穴(ピット)は、外周するものとしてP07・P08・P11・P14・P16・P17がそうであろうと思われるが、東面側は不詳であった。出入口と想定される庇の柱穴はP18・P19・P20・P23が顯出した。また、SK19・SK20・SK21の土坑は(図版2-2)、本址に共伴するものと思われるが、その機能的役割は不明解で、顯著な石体も伴っていない。しかし僅少の炭化物が検出されていることから、SK20は炉であったのかも知れない。

本址に伴う遺物としては、土器片45点・石器片12点・黒耀石片2点・石鍤2点・炭化物3点が出土した。

### 3. 柱 穴(P)

柱穴(ピット)として捉えられるものは25穴検出された。大半は径20~30cmを測るもので(第1表)、堅穴住居址が検出された南東面側に集中した(第6図)。P06などに共伴した土器片と、またSIに共伴する土器片などから考えて、そこには時間的間隙がみられないことから、

第1表 遺構計測表

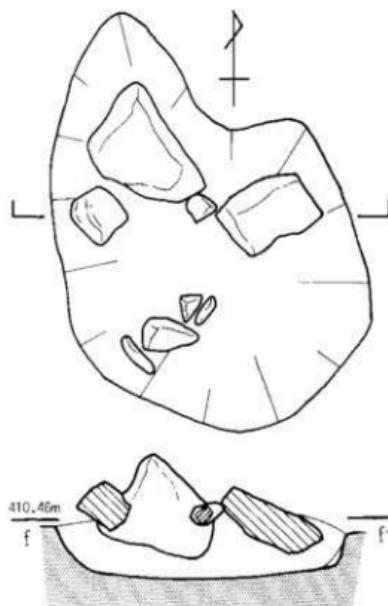
遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	検出面標高 m	概要	遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	検出面標高 m	概要
P01	26	34	9	410.12		SK15	82	100	9	410.19	
P02	26	32	8	410.10		SK16	38	40	12	410.23	
P03	26			410.12		SK17			25	410.30	4類
P04	16	18	9	410.09		SK18	24	56	11	410.28	
P05	24	30				SK19	46	92	12	410.05	
P06	30	34	4	409.91		SK20	66	154	6	410.05	
P07	30	32	7	410.15		SK21	56	80	9	410.03	
P08	28	30	14	410.22		SK22	42	62	7	410.19	
P09			18	410.22		SK23	36	40	13	410.20	
P10	24			409.98		SK24	32	46	11	410.20	
P11	26	30	9	410.15		SX01		268	23	410.20	5類？。配石。 上坑
P12	22		9	410.07		SX02		62		410.20	3類
P13	20	30				SX03		60		410.19	3類
P14	20	30	21	410.20		SX04		50	4	410.20	3類。立石
P15	22	32	5	410.13		SX05	42	80	17	410.32	
P16	20					SX06	72	88	6	410.33	
P17	24	28	4	410.16		SX07	150	160		410.24	2類
P18	20		10	410.23		SX08		102		410.24	3類
P19	22		13	410.19		SX09		80		410.32	3類
P20	20	26		410.23		SX10		300		410.34	1類。立石。外 輪に掘置穴
P21	16	20	5	410.17		SX11	160	190		410.18	2類。50×80cm の大石介在
P22	18	30	6	410.17		SX12		80		410.34	
P23	12			410.17		SX13		54		410.34	3類
P24	24		14	410.29		SX14	52	72		410.20	3類
P25	12		6	410.17		SX15	200	220	8	410.35	
SK01	40		4	410.10	土坑あり	SX16	108	122		410.28	1類。立石介在
SK02	94	154	8	410.10	炭化物	SX17			13		2類か3類のい ずれか
SK03	72	84	16	410.14		SX18	36	52		410.43	3類
SK04	170	200	16	410.18		SX19			6	410.35	3類
SK05	30		8	410.18		SX20	86	120	14	410.42	3類。立石。上 坑
SK06	66	76				SX21	54	90	13	410.41	立石。土坑。中 位面に土器數点
SK07	34	54	15	410.21		SX22	58	68			
SK08	142	360	47	410.44	炭化物、土器片	SX23	34	42		410.42	3類
SK09			8	410.43		SX24	46	78		410.42	3類
SK10	106	152	27	410.43		SX25	120	150		410.44	5類。祭壇？
SK11	60	86	7	410.43	数々点の土器片 共伴、炭化物	SX26			23		4類
SK12	72	134	29	410.36		SX27	34	52	25		4類。立石
SK13	34	44	11	410.24		SX28				410.20	3類
SK14	48	124	8	410.30		SI	320	420	13~20	410.16	数々点の土器片 共伴、炭化物

これらの付ける柱穴群はほぼ同時期のものであり、その掘りは南東側へ至っているものと想定される。

#### 4. 壬 (SK)

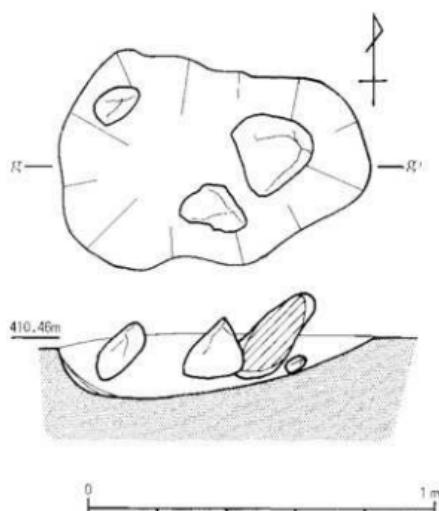
検出できた土坑は24基であった。そのうち北東端面に検出されたSK08(図版8-1)は、短径約1.4m、長径約3.6m、最底ととの差約47cmを測って、検出の土坑中では最大のものであった。坑内には埋土としての黒色土が堆積し、坑底部は基盤層である砂礫層まで至っていた。また坑底部の境界には若干の黄灰色土が堆積して炭化物、そして坑内中位面を中心にして土器片・石器剥片が数10点出土した(第14図)。これらの遺物は、坑内の堆積状況からみて、外杭から陥入したものではなく、本坑に共伴するものと判断される。

とくに多くの遺物が共伴したのはSK11であった(第14図・図版3-2)。短径60cm、長径86cm、深さ7cmを測る本坑には、土器片27点・炭化物10点余りが出土している。これらの遺物は上位面を中心に出土し、その下位面には酸化鉄が含浸して柱穴状のピットを形成していたが、その形態状況等は把握できなかった。おそらく土質の硬軟差から生じたものと想像される。またSK17とした土坑内には、2基の配石遺構が検出され、SX27には併立していたことを窺わせる立石が存在した(第7図)。この不整形の本土坑内には、やはり黒色土を主体となっていたが、下部には黄灰色土がブロック状に嵌入していて、人為的掘削がなされたであろうことが窺われた。また不整形の輪郭から種々の土坑が介在したと捉えられたが、黒色土の同一土といふこともあって、切合い関係などは明確ではなかった。隣接の土坑や配石の間隔状況からみると、おそらく時期を対にして作造したものと考えられる。こうした事例は、本町のヨレ遺跡や下手遺跡(弥生時代中期)でも「1坑内集坑型」という形態でみられるのである。そういうように判断すると、本坑をSXと略号してもよかつたのかも知れないと思われる。



第8図 SX20配石図

SIに接するSK04は、短径1.7m、長径2m、深さ約16cmを測る（図版3-1）。坑形は不整形であるが、輪郭は滑かで勾配もきわめてゆるい。坑内には立石状のものが確認されたが、それも20cm人と小さく、他の2石も疊層で、配石を意識したものと判断できなかったのでSKとしたのである。



第9図 SX21配石図

2節一層序概要）。したがって木米は、北西面側と同様な密度で存在したものと、検出状況等から把握できそうである。

**各基の配石概要** 検査区の北東面に検出されたSX20（第8図・図版3-2）は、短径86cm、長径120cm、深さ14cmを測る。坑内を覆う埋土は黒色土で、若干黄灰色土の砂土が混じっていた。また坑内の上位面には10~30cm大の河原石がまとまりなく配置されて、そのうちの数石は立石されていた様子が窺われたのである。そして、その同レベルを中心に、きわめて小片の土器が十数点出土した。

またSX20に隣接するSX21（第9図・図版3-2）は、短径54cm、長径90cm、深さ13cm測って卵形を呈する。坑内の埋土は黒色土を主体とするが、きわめて少量の黄灰色砂土がブロック状に嵌入していた。また坑内に埋るように陥入した3個の配石は、20~28cmを測るもので、いずれも立石状に配されていた。出土品としては、4点の土器片が遺構の検出面よりやや高い位置に出土したが、中位面以下には確認されていない。

#### 5. 配 石 (SX)

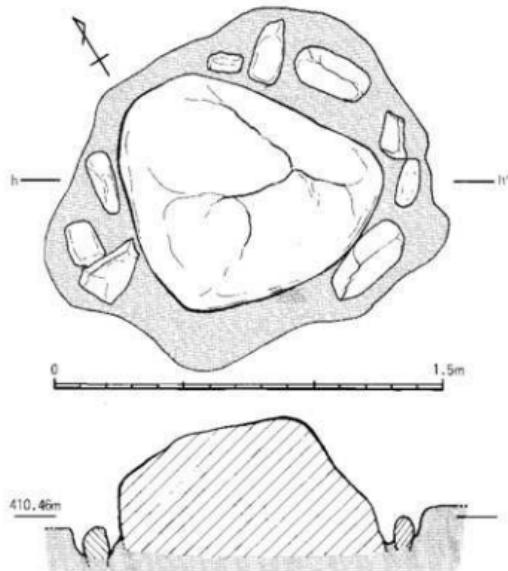
はじめに 配石遺構として捉られたものは28基検出された。しかし、これは完査したもの、あるいは形状的にしっかりしたものを押さえた上のことであって、想定感覚で捉らえる（上述したものにも存在するが）ならば、より加算できるものと思われる。ここでは一様、実査したものを中心に数例をあげるとともに、未調査も含め調査中に感じたことも含め、若干のコメントをしようと思う。

配石群は、調査区の北半に集中して検出された。分布状況をみると、北東面側は稀薄であるが、これは後世の水田開墾等において強い削平で、とくに北東端は石体がとばされた結果によるものである（第3章第

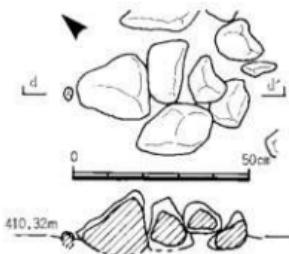
SXの中でも、大石をとり囲むように配石されたSX25は特異のものであった（第10図・図版4-1）。木基は短径1.2m、長径1.2mを測り、ほぼ楕円形。中央に座る石体は、短軸約1.2m、長軸約1mあって、検出面からの比高約26cmを測る。これらの検出面には、この石体を幅10~40cmを測り、やや砂性の灰色~褐色上が四周してい、西面側には炭化物が混った部分が確認された。そして、その褐色帯には20~40cm大を測る9個の平ための河原石がとり囲むように、とくに東面側を中心配されていたのである。完掘していないが、とり囲むように四周するこの褐色砂土帯は、部分的に混る灰色

土の様相から、これらを配するための調置き穴であったと思われた。とくに注意されたのは、平ための石をすべて横立てに設えているのである。そして、その天端面は検出面標高（410.44m）とはほぼ同レベルか、もしくはやや下がる程度の最大で10cm差あるのみであって、本来は平坦に配されていたのではないかと思わせた。また、それらのうちの3石には、長さを調整したものなのか、それ

とも自然破壊したもののなか折跡がみられた。しかし、残折部が確認されていないことから、それは意識的な行為であったものと考えられる。ただし、完掘し精査していないので、本基の機能的用途は明かにできないが、中央部に在座する大石の天端が比較的に面をなしていること、それをとり囲む配石が比較的平坦に配されていること、褐色帯の西面側には炭化物が嵌入していたこと、また出土物として炭化物以外、南面の周辺に土器片が数点出土しているものの僅か1点であった（第14図）ことなどは確認された。



第10図 SX25配石図



第11図 SX13配石図

形状からみる配石 形状からみると、大きく分類して5つのタイプが読み取られる。

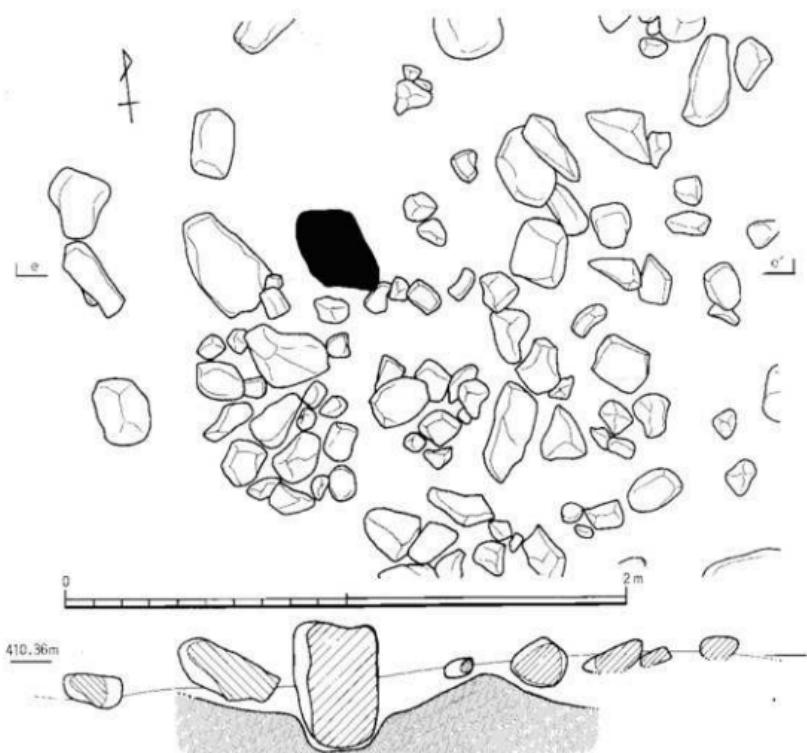
- 1類 大円2重配石 (SX10・SX16などの2重サークル状になっているもの)
- 2類 中円単円配石 (SX07・SX11などの単円状になっているもの)
- 3類 小円横石配石 (SX12・SX13などの小円で、横石状になっているもの)
- 4類 1坑複数配石 (SX26・SX27などの1坑の中に複数の配石があるもの)
- 5類 異型配石 (SX25あるいは立石などの円形とは異なるもの)

まずSX10・SX16と略号した2重配石のものである(第13図・図版5-2)。そのうちSX10は、外輪の径約3m、内輪は1.7mを測ってほぼ円形(第13図・図版5-1)。配石には20~50cm大の河原石が用いられていて、おもに外輪は縦方向に使っていている。また内輪内には40cm大のものが用いられ中央であったと思われる位置に立石状のものが1石みられた。この内輪内の配石は、外輪のものと比べて全体的に5~10cm高く配置されている。これは構築の状況、また上位面が削平されたらしさからみて、本来は積石状に盛り上げて配石されていたことを示すものであろう。そのように判断すると、外輪と内輪との間の石群は、転石であった可能性がある。また本基の北東側の外輪は、後世の強い削平で配石が飛ばされたらしく欠けているが、そこには褐色土の据置き穴と想定される陥入土が確認された。

北東面側に検出されたSX16(第12図・図版5-2)は、外輪の長径約2.2m、短径約2mではほぼ円形を呈する。内輪は長径1.2m、その短径1.1mを測ってやはりほぼ円形である。全体的に配石は縦的で、とくに外輪はそうであった。当基にはパターンの異なるSX13・SX14が介在し、また内輪の東面には顕著な立石が確認されている(第12図)。なお北壁面に検出されたSX17は、周円が広いと思われること、その輪郭の配石がしっかりしていることからみて、当類に属するものかも知れない。

2類としたものはSX07・SX11のタイプである。このうちSX07は、15~25cm大の河原石がきわめて疎間に円周する。その径は約1.5m測って、ほぼ円形を呈する(第14図・図版8-1)が、小石で構成されている。内、外坑との土層色調は顕著ではないが、明らかに配石周辺には据置き穴と想定される褐色~黒色を呈しており、人為を思わせる。またSX11は、短径1.6m、長径1.9m測っ

て梢円形を呈する（第13図・図版8-1）。本基には別タイプが介在しているらしく、よって配石に粗密差が目立つ。おそらく外輪を構成しているものが正しく、それも疎間に配されているものが本米の形態のものであったであろうと考えられる。



第12図 SX16・SX14 配石図

3類としたものはSX03・SX12などの小円形のもので、大半は積石状に濃密に構築されている（図版4-2）。本類のものは凡そ径50~100cm大のものがほとんど（第1表）で、1・2類に比べて小振りである。またこのタイプは前述したSX20やSX21で確認されているように、土坑を伴うものらしく、そのことは半掘としているSX02・SX14・SX16・SX18などにも顕著な色調差が認められることから裏付けられそうである。

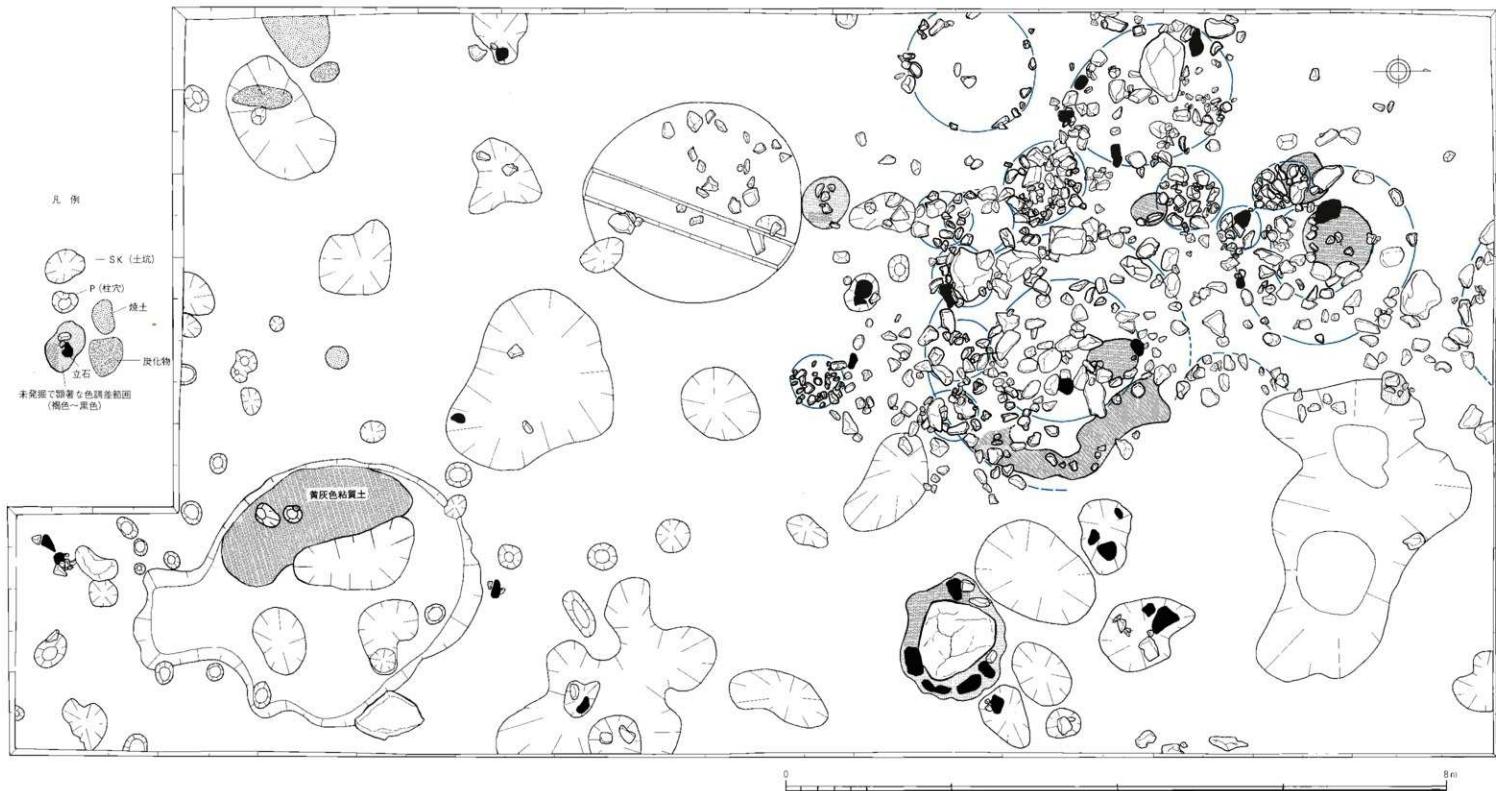
つぎの「1坑複数配石」とした4類は、SK17土坑に存在したSX26・SX27のタイプである。同基のものは、50cm前後ときわめて小振りで、しかも配石は2石と少く、配石遺構という基準を満たし得るのか疑問がかかるものの、SX27の立石状の配石状況には到着点を見出せないでもないと思われる。なお同坑の埋土が単一層であったため“切り合い”関係が捉えられなかつたのかも知れないが、現調査段階では複数同一性としてみたい。前述したが、こうしたタイプはヨレ遺跡で「集合的配石土坑」とし、また同様な検出状況であった下手遺跡（弥生時代中期）では、これを本遺跡で引用するのと同様「1坑複数配石」として捉えている。

5類とした「異形配石」したものは、他類の円形を基調したものとは異なる別型式のタイプを捉えたものである。例えばSX16に介在する立石（第12図）、またSX01やSX25（第10図・図版4-1）のように円形でありながら、前類とは包括できない要素が顕著であるものとした。

#### 6. 遺構と出土傾向

広義でいうならば、日常生活の場であったと想定される南半部は出土遺物が多く、祭場であったとみられる北半部は少いといえる（第14図）。それは配石遺構を多出した北半部は完掘していない、ということもあって一概にはいえそうもない。ただSX20やSX21の3類とした配石遺構で確認されているように、同タイプの土坑の中位面には小片・細片を中心とした土器が出土する傾向は確かにある（第14図）。しかし、南半部では日常活動の場であったらしく、土器は勿論であるが、打製石斧や石錘などの生活具が住居址などの遺構に付随して散見される、といった違いは見出されるのである。しかも出土率からみると、その伸延は南東側に向っているものと捉えられる。

（渡辺友千代）



第13図 遺構全図(2)

## 第4章 出土遺物

### 第1節 出土遺物の概要

#### 1. はじめに

本遺跡における遺物の取り上げは、後世の人為が加わっていないと思われる3層の茶褐色土から実測した。実測においては遺物の出土層を押さえるとともに、基本的には各点ずつ平面分布位置、また標高も測って垂直分布位置も捉えるようにした。また遺構内から出土した場合は、一括して遺構名を銘記して取り上げる、といった方法で実測した。しかし、それより上位層の1・2層での出土遺物は、層名を記したのみで実測は行わず、またそれらは点数及び図示化した出土状況（第14図）には捉えなかった。

#### 2. 出土遺物の概要

出土遺物の総点数は477であった。このうち最も多かったのは361点の土器片で、全体の76.31%を占める。つぎは石器類の79点（16.56%）である。このうち石器剝片が59点と最も多く、全体の12.37%。そして打製石斧（3点）・石錘（6点）・石鎌（2点）・磨石（2点）などの製品は13点と以外に少なく、全体の2.72%に過ぎない。また黒縞石片は7点出土しており、そのうち5点は乳白色、2点は黒色の黒縞石片であった。土器片及び石器類以外に出土したものは炭化物であった。点数として取り上げたものは34点（7.13%）であったが、腐朽物もあり、それらはいちいち取り上げられないこともあって、実際にはこの点数よりは増倍することは間違いない。したがって、点数や比率などでみるべきものではないが、そのことを踏まえた上で、取り上げている以上は一様確認だけはしておきたい。

これらの出土遺物の包含層は、黒色粘質土の4層であった。そのうち下位面が最も多出しており、平面的に身南東側に向かって高い密度で分布する（第14図）。また、遺構の検出面は、4・5層の層界に検出されていて、そこには遺物とのレベル差があるものの、それは埋土の單一が起こしたいたずらであって、層位的には矛盾するものではないと考えられる。したがって、両者は共伴性をもったものと捉えられ、そのことを裏付けるかのように、遺物は遺構面に同伴あるいは添うように出土しているのである（第14図）。

出土遺物の76.31%を占める土器片は、そのほとんどが3cmを満たない小片・細片であった。それはとくに配石遺構が群集する北半部に出土しており、石器類も僅少であった。また本店に伴うこれらの中器片を中心とした遺物は、3類とした十坑をもつと想定される「小円積石配石」に多出す

るという傾向がみられた。そして、その出上面は配石の下根部、つまり中位面（配石部を上位面・土坑検出面を中位面、上坑内を下位面とした場合）と捉えられるレベル位置に大半は出土しているのである。1類としている「大円2重配石」は、完掘（下半部）していないので詳細は判らないが、外輪部には据置き穴と想定される以外は、坑を有しないのではないかと考える（内輪のものは別として）。

## 第2節 実測遺物

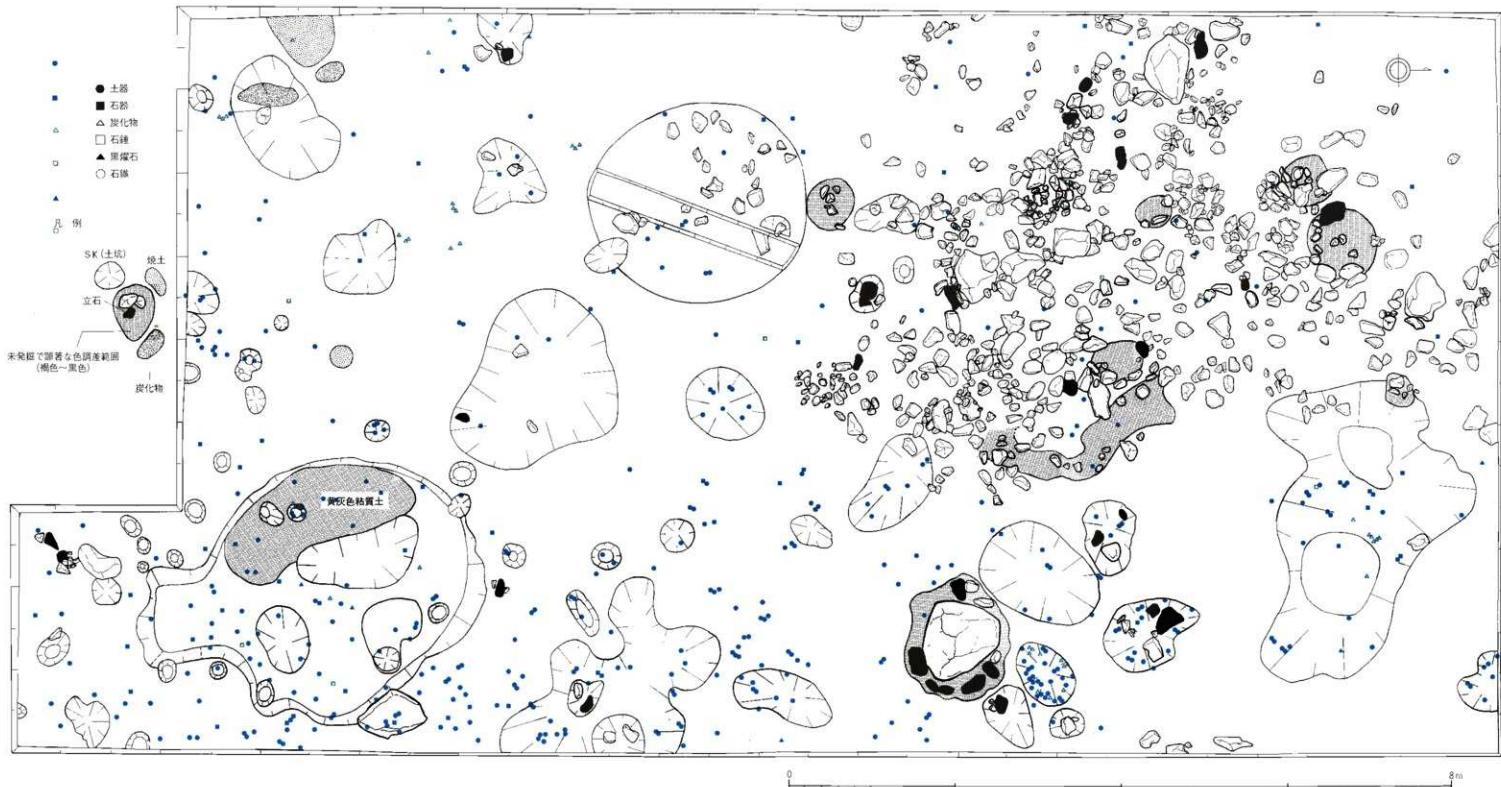
### 1.はじめに

遺物実測を紹介するにあたり、できるだけ多くのものをするべきであったが、再々触れてきたように、土器においては極めて細片であって、大半は実測すら難しいものばかりであった。また、そのほとんどは無文で、しかも特徴が認め難いものが多かったのである。石器類においては、製品として捉えられるものは13点と、これまた僅少で、残りは石器剝片ばかりであった。したがって、ここでは土器においては特徴を見出すことのできやすい口縁部を中心に、また有文のもの、調整痕が読みとれやすいもの、そして土器片の中でも比較的大片であったものを選んで紹介することにする。

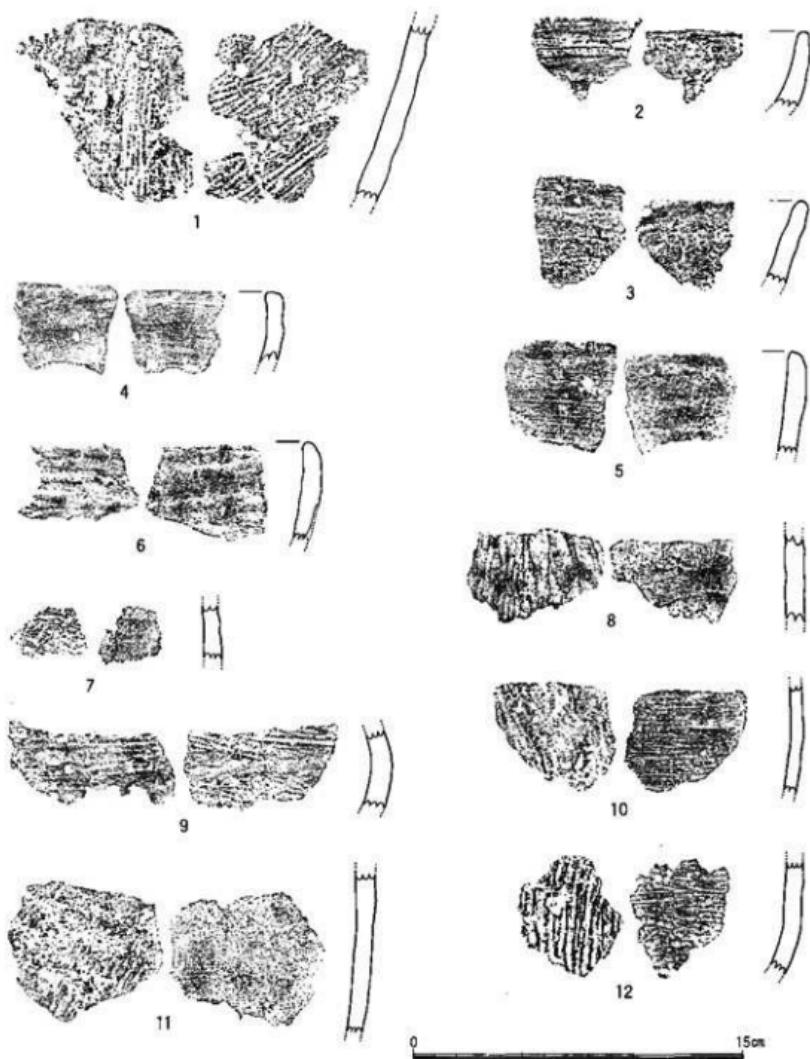
### 2. 実測土器（第15図・図版8-2・9-1）

1は、SK08土坑内に出土した粗製土器の胴部。やや厚手で、内外面とも2枚貝による条痕文。色調は赤褐色を呈し、焼成は比較的良いが、器面は粗く凹凸する。他の土器が中津式系の特徴を整えていることから、該当期の範疇に捉えられるものであろうが、調整や色調からみると異なる土器のようにも思える。2は、SK10土坑から出土した粗製土器の口縁部。外面は巻貝による条痕文で、内面はナデ調整である。外面の色調は茶褐色で、内面は煤が付着して黒褐色を呈する。3は、SK14から出土した粗製土器の口縁部。調整は指ナデで、色調は黄褐～淡茶色を呈する。焼成は良好で、胎土は緻密である。4は、住居内に出土した精製系の口縁部。内外面ともヘラ磨きで調整する。色調は外面黒褐色、内面は茶褐～黒褐色を呈し、胎土には2～3mm大の石粒を含む。5は、SX23に接した位置に出土した半精製の口縁部。外面の調整はケズリの後、ナデを施したように捉えられる。内面はナデで、焼成は極めて良好で堅緻。内外面とも茶褐～黒褐色を呈する。

6は、SX11内に出土した粗製系の口縁部。内外面とも指ナデで仕上げる。胎土は緻密で、焼成は良好。7は、SK14土坑から出土した粗製土器の胴部片。外面はケズリ、内面はナデである。色調は赤褐色を呈し、堅緻である。8は、SK04土坑に出土した粗製系の胴部片。外面はヘラ磨きで、内面はナデ調整である。色調は灰黄色を呈し、外面には煤が付着する。胎土には2～3mm大の砂粒を含む。

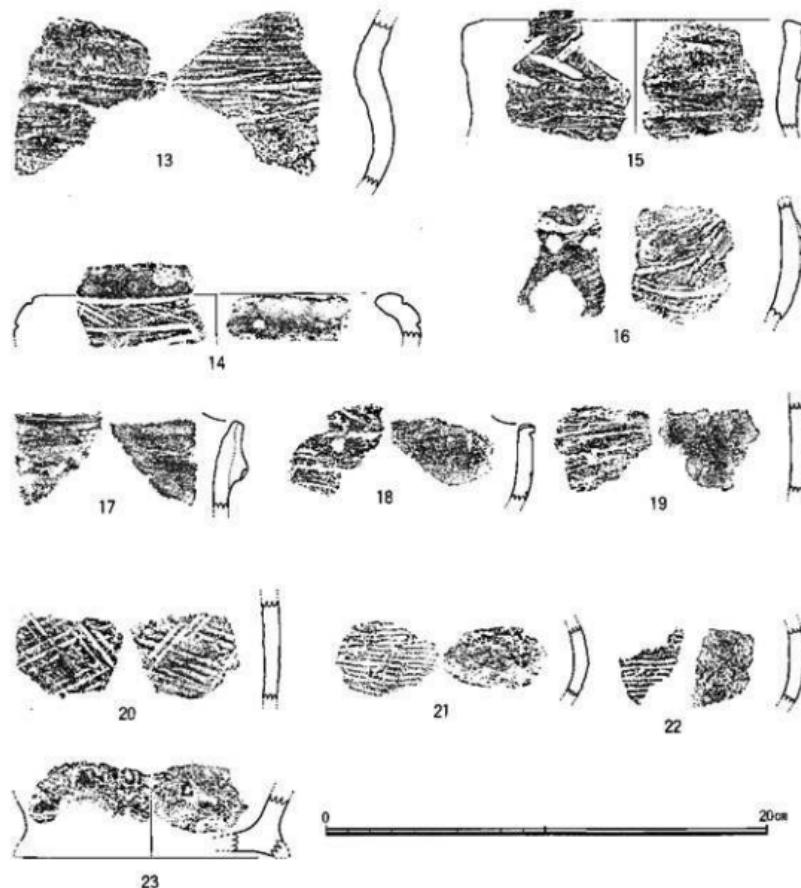


第14図 造構園と平面的遺物出土状況図



第15図 出土土器実測図(1)

9は、SX20に出土した粗製系の胴部片。内外面とも2枚貝による条痕文で調整。胎上には3～5mm大的石粒を含み、ややもろい感じがするが、堅緻である。色調は茶赤褐色。外面に煤が付着している。10は、南西端に出土した薄手の粗製系の胴部片。外面は2枚貝による条痕文であるが、上面と内面はナデ調整とする。色調は黄褐～淡茶褐色を呈し、胎上に砂粒を含む。11は、SX25の南辺に出土した粗製土器片。外面は条痕調整であるが、風化のため原体は不明。内面はナデ調整。



第16図 出土土器実測図(2)

器体はやや厚く、胎土に石英の砂粒を多く含む。色調は灰褐～橙褐色を呈する。12は、SX21に出土した粗製土器の胴部片。内外面とも巻貝による条痕文。胎土に2～3mm大の石英を多く含む。焼成は良好で堅緻である。13は、住居址の出入口に出上した粗製土器の頭部片。内外面とも巻貝による条痕文を施す。外面には濃厚な煤が付着し、内面の色調は淡橙色である。胎土には石英を含んだ砂粒が多くみられる。

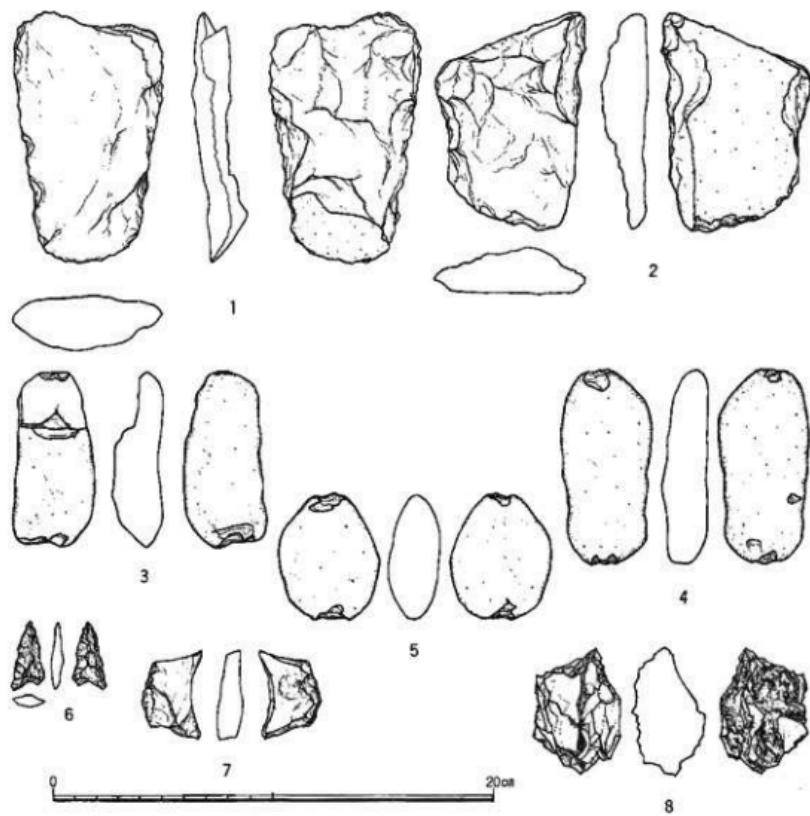
14～18は有文の口縁部。そのうち14は、SK08上坑内に出上した府消繩文土器の口縁部。口縁部は強く内彎し、その外面には2本沈線で区画した窓枠風のLRの繩文帯を施している。内面と外面の非繩文帯は精緻に磨かれている。色調は風化したものと思われ、黄褐色を呈する。本片は中津式のものである。15は、住居址内に出上した粗製土器の口縁部。外面に2枚貝条痕文を施しているが、口縁部端及び内面はナデ調整とする。また外面口縁部には棒状施文具による羽状の単線文を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には2～3mm大の石粒を若干含んでいる。16は、SK08上坑内に出上した粗製土器の口縁部。調整は内外面とも条痕文で施し、口縁部外面は肥厚させ、その肥厚部に横位の竹管状の垂直刺突文を施したもの。色調は黄褐～橙褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。このような上器は、木町のイセ遺跡でも散見され（有文七器－第16類）、また山口県の月崎遺跡（上層Iのc-d）や同じく尾敷遺跡（繩文土器Ⅱ類b）でも確認されている。17は、SK07上坑内に出上した粗製土器の波状口縁部。外面に凸帶を有し、その凸帶部に斜向の押引文を施文する。内外面ともナデ調整で、胎土に砂粒を多く含む。焼成は堅緻で、色調は黄褐～橙褐色。

18は口縁部で、住居址から出土したもの。口縁端部を刻み、外面を条痕で調整した後、横方向の細沈線を施す。内面はナデで、色調は黄褐色を呈する。19は、SX20の東辺に出上した粗製系の胴部片。外面にケズリとは異なる横方向の隙間のある細沈線を施す。内面はナデとは異なる磨きふう。色調は外面橙色、内面は灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土も緻密。20は、住居址から出土した胴部片。内外面とも2枚貝による条痕文。焼成は堅緻で、色調は灰～褐色を呈する。21は、住居址から出土した小型の鉢片。外面にLRの繩文、内面はナデで調整する。外面は黒褐色、内面には煤が付着して黒色を呈するが、胎土は橙褐色である。22は、SX25の南東辺に出上した胴部片。外面にLRの繩文、内面はナデ。色調は外面橙褐色、内外には煤が付着して黒褐色を呈する。23は、SX11から出土した粗製の底部片。外面は条痕文、内面と底部外面はナデ調整。底部面はやや上げ底。色調は淡橙色で、内面に煤が付着する。焼成は脆粗である。

以上みてきたように、これらの実測土器は、出土した土器中でも良好なものを選んで図化したものであるが、口縁部も少なく、細片であるため器形は判り難いものが多い。しかも精製は極めて僅少で、ほとんどは無文・条痕地の粗製系のものである。

これらの粗製系の調整手法は、指、ヘラによるナデ、また巻貝や2枚貝による条痕地のものがみ

られるが、板状具によるケズリもみられた。そのほか種であるがヘラミガキもある。また焼成によるとと思われるが、色調においては半数ちかくが茶褐～棕褐色といった赤褐色系が多く、胎土に砂・石粒を含んだものが大半であった。



第17図 出土石器実測図

本遺跡は、土器の編年からみて、縄文時代後期に位置付けられるものである。その下限は、磨消津雲（第16図・図版9の14）の中津式にみられるように、後期初頭にあって、また上限は限られた資料から判断するのは難しいが、第16図・図版9の15・16からみて、広義でいうところの縁帯文系の津雲A式に比定されるものではないかと思われる。

### 3. 実測石器（第17図・図版9-2）

1は、住居址の北辺に出土した打製石斧。材質は凝灰岩。器高は10.5cmを測り、重さ147gである。背面の下部に自然面が残り、突出する。荒削りした後、周辺部を打裂を加えて鐵形に整形する。

2は、SK03土坑内に出土した打製石斧片。材質は凝灰岩で、頭部の大半は欠損する。

3～5は、打欠石錘。そのうち3は、住居の出入口に出土したもので、材質は粘板岩。両端を打ち欠いた打痕がみられる。器高約7.7cmを測り、重さは76g。4は、SK15土坑の北西辺に出土したもの。材質は粘板岩。器高は8.8cmを測り、重さは100g。5は、住居内のSK21土坑内に出土した亀形を呈したもの。材質は花崗岩。器高は5.8cmで、重さ68gである。6は、住居址から出土した石鎌。材質は安山岩で、器高3.2cmを測る。7は、石器の剥片。材質は安山岩で、楔形を呈する。打裂面には縦剥ぎ方向の打裂痕が數打みられる。重さは12g。8は、住居址から出土した黒耀石片。色調は乳白色を呈し、材質は不純物が石目に重層してみられ、粗品である。重さ50g。

以上、僅少な石具を中心みてきたが、やはりこれらの生活具としての石器類は、南半部の住居址を中心とした周辺に出土している。しかし出土しているとはいえ、生活の重要な住居址があった場にしては余りにも僅少である。このことは該当住居の生活期間が短かったというであろうか。

（渡辺友千代）

## 第5章 小 結

### 第1節 遺跡の様相

本遺跡の存続期間を、僅少の中の見通しのきく七器をもって想定すると、中津式土器（第16図-14・図版9-1-14）を捉らえて縄文時代後期初頭とし、口縁外面の肥厚部に竹管状の刺突文した類（第16図-15、16・図版9-1-15、16）の、いわゆる津型A式に併行する時期を想定して、縄文時代後期前葉期に至るまでのもの、として大枠で捉らえることができると思われる。しかし、斜列沈線文や刺目のみで比較的薄く、装飾が退化した兆しの土器もみられることから、上限に向ってはやや広がるのではないかと想像する。

また遺構においては、柱穴状（P）・土坑状（SK）・住居址（SI）・配石（SX）などが検出されているが、これらは層位のあるいは共伴性からみて、該当期のものであることは間違いないと考えられる。しかし、そのように遺構が顕在しているのにもかかわらず、遺物あるいはその種類の僅少には、気がかりな面が内蔵しているように思われたのである。例えば、石器類では石器剝片以外、その石具として打製石斧・石錘・石鏟・磨石のみの計13点と少なかった。また、土器片は364点と出土しているものの、大半は2~3cmの小片・細片で、器形は勿論のこと、上器形式をも読みとることができない状態のものがほとんどであったのである。とくに上器の小片・細片であったということに、そこには何か縄文人の意図が介在しているように思われてならないのである。

本遺跡では、2つの差異のあるプレイスがみられた。それは南半部の住居址等を伴った日常生活の場と、もう一方の北半部の配石群を中心とした非日常的と想定される場である。これらは共伴した遺物から顕著な差は確認されていないものの、ただ石器類の出土状況には違いがみられたのである。つまり、日常生活の場であったと想定される南半部では、土器片とともに石具および石器剝片の出土比率が高く、一方、北半部では上器片が主流を占めていたのである。しかも北半部では上器片を中心に坑内（南半部では3層下位面でも遺物が多出している。つまりレベルでいえば坑上範囲）の出土が高いことが想定されるのである。しかし、非日常生活場と表微的に確認できるものは、1部しか完掘していないこともあるってかどうかは定かではないが、皆無であった。

## 第2節 配石寸考

配石遺構（SX）として捉えているものは、28基であった。しかし形状的に捉えると、より加算されるものと思われる。これらの配石遺構としたものは、光掘によって明らかになったもの、そして半掘でも配石および土坑形跡から想定できたもの、形状から想定できるもの、などによって捉えたものである。

これを、さらに配石遺構を形状から5つのタイプに本報告では仕分けした（第3節-5、配石（SX）。つまり1類としたものは2重状のサークルをなして大形のもの（大円2重配石）、2類は中形の円状で外輪のみのもの（中円単円配石）、3類は小形の円状をなし積石的なもの（小円積石配石）、4類は1坑の中に数基の土坑および配石を伴っているもの（1坑複数配石）、5類は上述のものとは形状・形態的に異なるもの（異型態配石）、としたのである。これらの配石遺構を完掘し精査していないので、形態的な意味あいまいで捉えることはできないが、ただ分布状況から時間的な新旧が把握できないでもないと考える。

まず、1類とした2重配石のものが最初に構築されたものと想定される。それは本類の配石内に別類の、とくに3類とした配石が介在していることから把握できるのである。例えば、1類のSX10には3類としたSX09・SX22などの配石が、またSX16にはSX13・SX14あるいは別類の立石配石などが介在しており、つまり1類の配石が造られた後、とくに3類とした配石などが重複して構築されているのである。したがって1類配石に別類の配石が介在しているために、形状は不一であるのに対し、後に重築されたと想定できる3類配石などは整齊であることから、容易に判断できるのである。

同様な状況は、2類とした「中円単円配石」のSX11配石でもみられ、やはり本類の中に別類のものが介在している様子が窺われたのである。そのことは1・2類配石が最初に造られ、そして3類配石などが後に造られたことを物語っていることになり、1・2類配石→3類配石への変遷が窺われる所以である。つまり、1類配石の内輪部分が3類配石に変異したようにも受けとられるのである。精査していないので詳細については判なかったが、確かに1類配石の内輪部分には、顕著な色調差が認められるものがあり（SX10・SX16内）、それは土坑をもつと想定される3類配石と同様な形態を示しているので、肯定できないでもないと考えられる。また、SX16配石に介在する直立する立石配石（23×34cm、高さ47cm）も同様な状況下からみて、2類配石より後のものであることは間違いないと考えられる。ただ4・5類配石（立石配石は別にして）などについては、1・2類配石に伴うものか、また3類配石に伴っていたものだったのかは把握できなかった。また5類としたSX25は、大石の天端面が比較的平坦で、それをとり囲う配石が壇状をなしているため、その形

状から祭壇としての祭場ではなかったかと想像させたのである。

以上、中途半端な小結となったが、いずれにしても完掘調査していないので、こうした論解になつたことをお許しいただきたい。なお本遺跡は、城上に法で保存されていることを付け加えて筆をおくことにする。

(渡辺友千代)



遺跡周辺を鳥瞰する

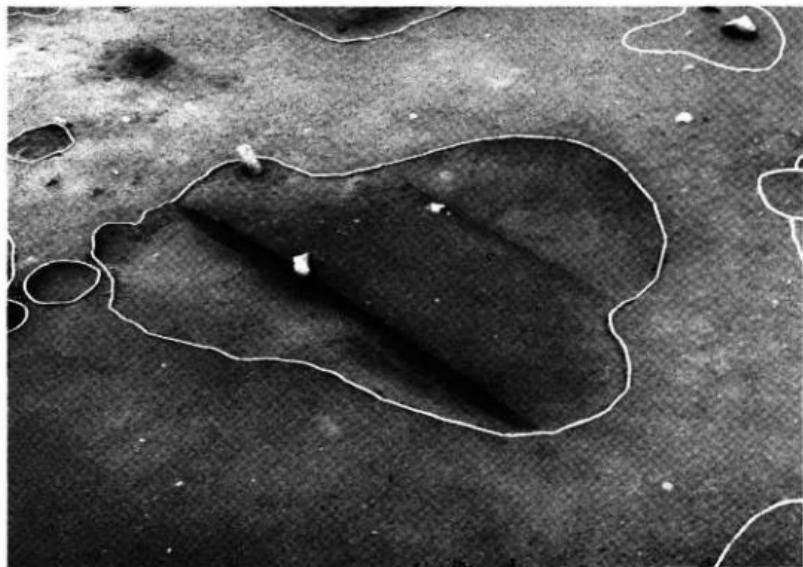
図版 2



1. 北面から見た遺跡遠望



2. 遺構表示状況(竪穴住居内)



1. SKO 4 検出状況(北東から)



2. SK10・SK11・SK20・SK21 検出状況(南から)

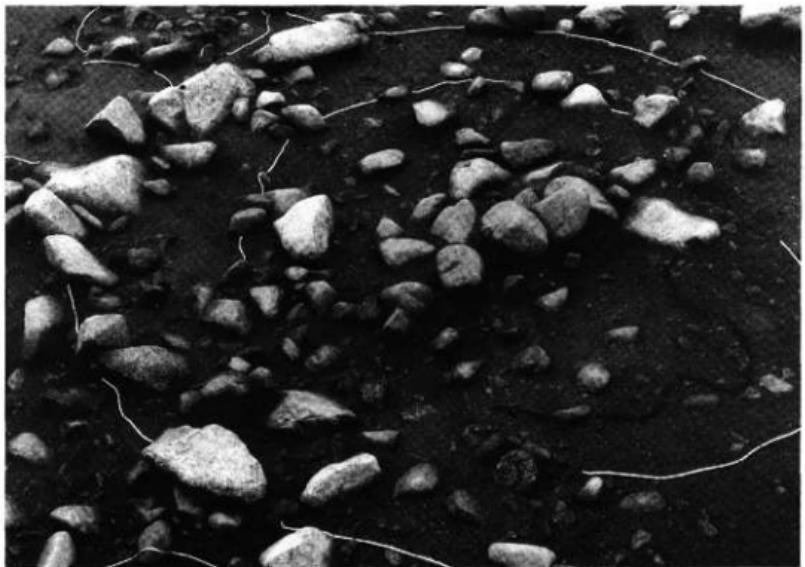
図版 4



1. SX 25 検出状況(西から)



2. 南から見た配石検出状況(手前は SX 03)

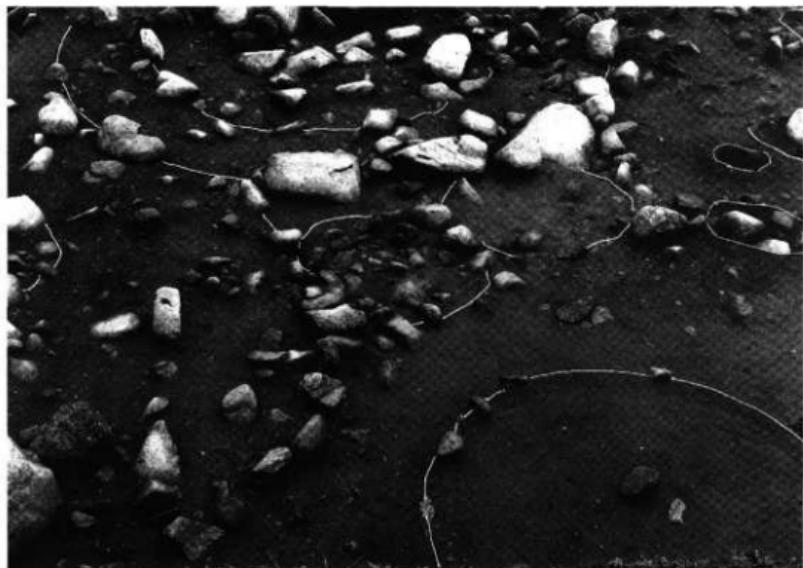


1. 東から見た SXIO



2. 北から見た配石群(2重サークル状が看取される)

図版 6



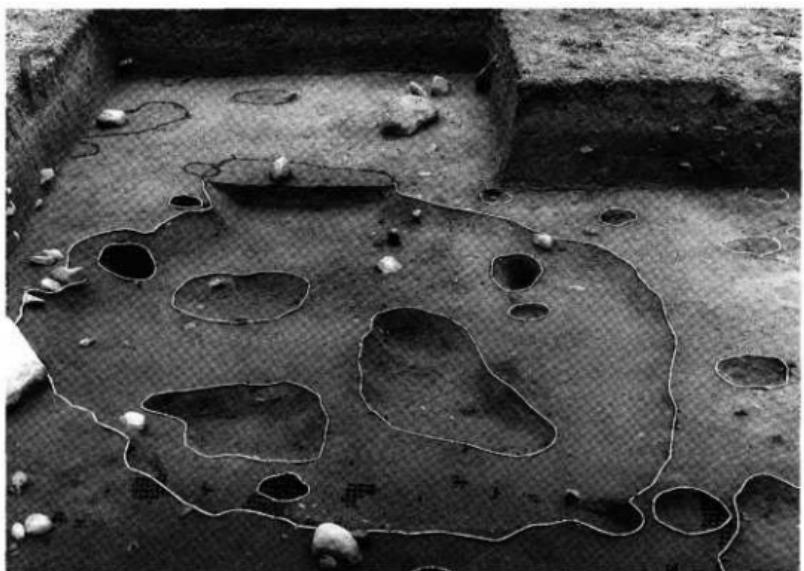
1. 西面の配石群(中央部は S X O 8)



2. 西から見た S X I O (中央部)



1. 東から見た配石群

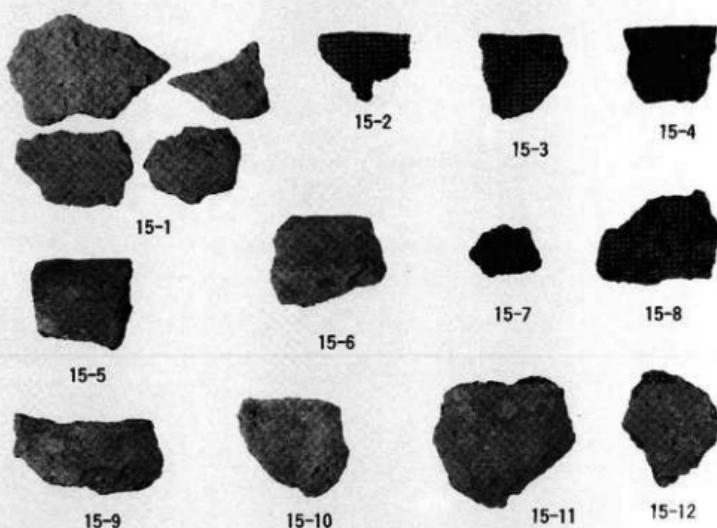


2. 北から見た竪穴住居址

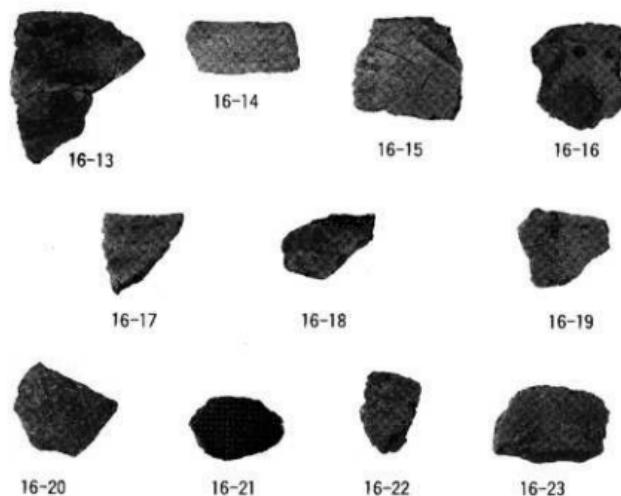
図版 8



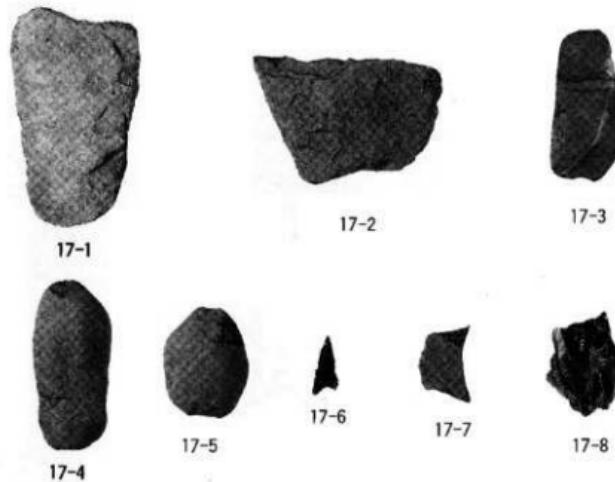
1. 発堀区全景



2. 土器類 (1)



1. 土 器 類 (2)



2. 石 器 類



---

平成7年3月10日 印刷  
平成7年3月30日 発行

## 前田中遺跡

発行 四見町教育委員会  
鳥根県美濃郡四見町字1260  
印刷 有限会社 谷口印刷  
鳥根県松江市丹波町89

---